

# 文部省史料館報

第 14 号

昭和 46 年 7 月

## 目 次

元禄の道程書上……………	児玉 幸多…(2)
西日本地区「近世史料担当職員講習会」を終えて……………	(4)

## 整理と分類

近世鉦山文書の整理……………	大野 瑞男…(5)
—— 荒谷家文書目録の作成を終えて——	
府県庁文書の目録化と分類をめぐって……………	鈴江 英一…(10)
史料館所蔵史料目録第17集刊行に寄せて……………	大村 進…(11)
農村文書(二)——村明細帳——……………	藤村潤一郎…(6)
民俗資料	
俗流管理論(中)……………	中村俊亀智…(8)

## 情 報

京都府立総合資料館の現状と当面の問題……………	(13)
古文書の活字化……………	猪井 達雄…(14)
長崎県の郷土資料……………	石田 保…(14)
新収史料紹介……………(15)	
昭和 46 年度近世史料担当職員講習会 (東日本地区)案内……………	(15)
彙報・その他……………	(16)

## 元禄の道程書上

児 玉 幸 多

江戸幕府では元禄十二年に郷帳と国絵図の作成を諸大名に命じたが、更に十五年になって、各城下町より



江戸までの道程と、一国内の各城下町間の道程とを書き上げた。

そのときの陸奥国に関する一件書類が伊達家に伝わり、現在は仙台市立図書館と宮城県立図書館とに所蔵されている。それをもとにして、その経過を述べてみよう。

元禄十五年二月二十六日に、大目付衆より廻状を以て諸藩邸に對して、明日七つ時に出勤するように通達があり、仙台藩では公義使の猪狩長作が大目付安藤筑後守方へ出勤すると、左の書付を渡された上、口頭で、先年道程のことは書き上げもあるが年久しきことであり、国絵図改めをしている際であるから、特に命ぜられることである。すでに国絵図を提出した藩でも、まだ提出しない藩でも、絵図と相違しないようにすること、

合点のいかないことがあれば何度でも聞き合せること、<sup>おのづか</sup>各方は国絵図には関係ないから合点がいかないだろうが、絵図方の役人へ相談されればよからう。提出はあまり遅れてはよくない、などのことを申し渡された。その書付は、

覚

一誰城下より江戸迄之道程、但日本橋迄、一国内誰城下より誰城下迄の道程、

一万石以上居所在之所より江戸迄之道程、右同意

一海陸在之所又は往還両道在之所は両様書分ケ可被指出候、以上

二月

この日は仙台藩のほかの陸奥の諸藩よりも役人が出勤していたが、仙台藩の記録では、それを公義使と呼び、公義使仲間ということも言っている。これは一般には留守居と呼ばれて、江戸において外交官的役割を果たしていたものである。幕府より諸藩に通達、連絡することがあれば、大目付が留守居を招集するのが例で

あった。そして、陸奥の諸藩の留守居は仲間を作っていたのであろう。

このときには、陸奥国内では、仙台的のほか、南部(盛岡)・丹羽(二本松)・内藤(棚倉)・秋田(三春)・松平(若松)・松平(白川)・相馬(中村)・津輕(弘前)・内藤(平)の諸家からも公義使が出勤していたが、かれら仲間意見で交した結果、今般提出の新絵図の扣で調べる必要があることや、各領内の道程について打合せることなどを定め、いずれも国許から絵図役人を呼び寄せることにした。

仙台藩では、江戸にいた坂元勘之允を道程書上御用の担当とし、国許よりは本々一人と絵図方の功者一人を出府させることとして、熊谷半右衛門と窪田孫八郎が三月十五日に発足して、二十二日に上着した。猪狩長作は諸藩との交渉にあたり、津輕藩の書上の写などを借りてきたりした。

それによって下書を作り、四月二十五日に長作が安藤筑後守の用人根岸喜兵衛・松井清右衛門に見せ、内々に意見を聞いた。そのときに幾つかの質問をした。

一仙台より江戸日本橋まで、そのほか他領域下への道程を書くこと

すれば、その間には幕領も私領も入りこんでいるが、一領ごとに代官や領主に問い合せて書くのか、あるいは、たとえば仙台城下より二本松城下への道程は仙台領と二本松領とだけは絵図に違わないように記し、その間の幕領・私領は古来から聞き伝えてある道程駄賃付で書くのか。

二海陸のある所、往還両道のあるところは両様に書き分けるとあるが、仙台から江戸までの間に仙台領分境の刈田郡越河村通から二本松と白川通へ一筋の道がある。また相馬境の宇多郡駒ヶ嶺通より相馬通ならびに岩城・水戸領へ一筋あるが、これらは陸奥守(藩主)が通行することはない。下中の者も常々は往来しないが、これらも両様書き上げるのか。

三松前志摩守領内の松前への道程、松平出雲守の領内梁川への道程、松平宮内少輔の領内桑折への道程も書き上げるのか。

これについて根岸と松井の内意は書上の案紙はこれでよい。質問の一は、道筋の幕領・私領も問い合せて相違のないように書くこと、私領はその所の役人へ聞き届け、幕領は代

官衆の所へ行つて聞き合せるがよい。もし支障があれば、筑後守より指図をして指しつかえないようにする。

二の駒ヶ嶺村宿通から江戸までの道程は、陸奥守様が往還されないならば書き上げには及ばない。こちらでは書き出し次第のことであるから、両方を通れば両様を記し、往還がなければ不用と思うが、これはそちらの吟味次第である。三の、松前への道程は書き上げたがよろしかろう。

松前への道筋の海辺際までの道程を書き上げ、舟路はしいて必要ではないが、聞き及んでいることを大略でも書き上げたよろしかろう。

松平出雲守と松平宮内少輔の領内への道法は書き上げに及ばない。梁川と桑折から江戸日本橋までの道程は御近所の城主より書き上げられるがよい。さもないと御両所のような方の領内から江戸までの道法の書き上げがなくなり、脱落ということになるから、相談されて、御近所の城主より書き上げられるがよい。

このほかにも筑後守の用人にたずねた事柄がある。

何拾何町何拾何間と書くのか、又は何拾何町余と書くのかという間に對しては、何拾何町と書けばよい。何拾何間というのは除き、そのとき

は何拾何町余と書けばよい。前々には、このような書き上げには領主の直名を記さなかったが、今度の書き上げにも、江戸詰合の家老一人ではないか、家老連名にすべきか、という間に対しては、どこからも直名で提出されているから、年号月日の下に直名で出されるがよい。直名でないと、どこから出されたか、「ちよつと相知れかね」るので、直名でさし上げるように。もつとも判形をする必要はない。

一方各藩との打合せもあり、会津藩の役人が猪狩長作の長屋に来て相談をすることなどもあるが、長作には判らぬことが多いので、半右衛門と孫八郎にも出会わせたが、会津藩の役人は馬上で供廻りもある身分であるが、半右衛門と孫八郎とは輕輩で、直接の応待はしかねるので、主立つた専任者が必要となり、長作は藩主のお供で国許へ行くので、坂元勘之允が前に国絵図に関係していたことから、その任に当ることになり、半右衛門と孫八郎とは五月二十二日に、にわかに御目見を仰せつけられた。どの藩でも国絵図に關係した役人を国許から呼びよせ、留守居同士が情報交換しあつたりした。白川藩の留守居山川久左衛門は「道程御

書上之儀ちよつと仕候儀と存候得ば、扱々こまり成事に御座候」とこぼしたが、どこでも同じであつたようである。

幕府の御絵図小屋役人からも種々の指示がある。道程何里というのは、絵図の一里星（国絵図には一里ごとに小さい黒丸が道の両側に打つてある）を数え、国境の一里星より余つた町数は絵図に書きつけてないから、隣国の役人に申し合せて、隣国の一里星までを一里として計算することなど、細い指示もある。東海道や中山道を通る大名で、美濃路を通ることであれば、その国の追分の所から国境までの里数を書きつけ、但し美濃路と書くように。往還道筋にかからない小道は一里星もなく、また絵図に載らない道もあろうから、それは、その城主の役人より書付を取る。もつともその道程を改めて調べるには及ばず、申しならしめる道程でよい、などの指示もあつた。

また若年寄井上河内守へも指示を仰ぎ、用人長浜次左衛門よりも細い注意を受け、下書について再三相談したりした。また藩主が仙台へ下つていたので、国許へも送つて藩主のお目にもかけたところ、会津領で猪苗代に城地とあるが、城地ではある

まいと言われ、会津の役人に問い合せたところ、猪苗代には城があるという答えを得たこともある。

この結果、七月二十一日に、本郷の公義御絵図小屋へ、坂元勘之允と熊谷半右衛門とが道程書上を持参し、安藤筑後守方へはその写を上げて、御絵図小屋へ納めた届けをし、さらに井上大和守方の長浜次左衛門にも写をやり、老中の阿部豊後守と稲葉丹後守方へも参上して、提出したことの届けをした。

この一件について坂元勘之允が詳細な記録を残しており、長浜次左衛門との往復文書、奥州諸藩役人との往復書状等が克明に写し取られていて、道程書上までの経緯が明白である。これは元禄の国絵図作成と関連するもので、それとの関係や道程の内容などのことは別に書く折があると思うが、昨年仙台へ行つたときのメモ帳のなかから一端を紹介する次第である。

（筆者「写真は学習院女子短期大学長、当時評議員」）

## 西日本地区「近世史料担当職員

### 講習会」を終えて

去る六月七日―一二日、文部省（史料館）主催の標記講習会が山口市山口県文書館で開催された。

新幹線で乗ついで、東京から一〇

時間の山口市は、旧守護大名大内氏の城下、幕末の山口藩庁所在地、現県庁所在地であり、会場の山口県文書館には毛利氏藩政史料、県政史料などが多量に収蔵され、活潑な文書館活動もみられる好適の地。隣町の湯田温泉に講師・受講生の宿舎がとられ、閑雅な地方都市の雰囲気のかで六日間の講習がすすめられた。

受講生は四一名（内、女子五名）地域別では近畿九名、中国一六名、四国三名、九州一三名、職域別では公立図書館一九名、大学付属図書館一三名、大学研究室・研究所三名、資料館・文書館・博物館五名、県文書館一名となっている。今回は地方史編纂室関係がゼロであるが、業務者は三名。

今回の講習会は地方会場としての初回のものである。受講申込者の過多緩和、地方受講者の受講便宜、地

方文化への寄与・交流などへの配慮から、地方開催の運びとなったのであるが、実施にあたっては若干の工夫を必要とした。

当講習会では、史料概論（中世・近世・近代）、近世史料読解（幕藩・村方・町方）、史料処理（整理・管理・分類・補修）が三本柱になっているが、地方会場の場合には特に地方的要素を「概論」と「読解」の両分野に織り込むことが要請されるわけで、今回は広島大学の後藤教授に「中国地方近世史料の概況」と「地元（中国地方）史料読解」をお願いして、非常に有意義なお話をいただいた。この方面は今後さらに拡充が考慮されてよいかと思われる。また、当館主催講習会の一特色とみられる「史料処理」は、今回は講師派遣の都合上、小規模におわつたが、この面の拡充も必要とされよう。

宝月、石井、古島、遠藤、後藤の各講師の先生方には遠路御出講のところ、それぞれ御専攻の分野について、一段と熱のこもった感銘深いお

話をいただき、特に古島先生には違和をおしての御出講をいただいた。心から厚く御礼申上げたい。

石井先生の特別御出席をいただいた「座談会」は、自己紹介を中心とした座談方式ではあったが、なかなか雰囲気の中に職場報告、講習会所感など示唆にとむ多彩な座談が開陳された。

そのなかでの若干の印象を述べれば、その一つは、受講生の方々は、各職域で近世史料の処理を中心にした地道な、有益な労作を着実に蓄積されつつあるという点。歴史研究なり地方文化―日本文化推進のいわば地の塩になる貴重なそれである。その二は、地方会場での講習会は地方在住の方々参加に便宜であるという感想が多かった点。東京会場では参加できない人も地方会場だと出席が容易であり、多人数の参加が可能だということである。その三は、地方会場での講習会は講師・当史料館と受講生・地方関係者の方々との間に、現地に即した親近感のある交流がえられるという点。これは得がたいことである。

なお、座談の際、九州某県の図書館の方から、来年度西日本会場をぜひ当方へ、という強い希望が述べら

れたことを申添えておきたい。

夜、宿舎で、九州地方のある受講生の方の来訪をうけた。市の図書館の啓発普及事業の一つとして、近世古文書の第一集を出したが意見をききたいというのである。みれば、庄屋日記など数点（抄録）が謄写印刷されたザラ紙の冊子で、上段には本文（謄写ファックス）下段には読み下し文（ガリ版刷）が対照的に配置されており、読み下し文の漢字にはすべて「よみがな」がつけてある。一般市民の人たちには、よそよそしい古文書集のそれではなく、こうした方法がまず必要ではないかというわけである。大衆に直接した現地の切実な試みとして興味深い。そこまで降りていく必要が、やはりあるといえよう。

地元の山口県文書館には、会場として長期にわたり多大のお世話をいただいた。そのうえ、同館所蔵史料についての兼清館長さんの解説、および同館所蔵史料の全貌と一部展示史料の見学をお願いした。世評の高い所蔵史料などにふれることができて、史料調査研究のための再訪を思うことしきりであった。末筆ながら県教育委員会・同文書館、お世話をお願いした館員の皆さんに対して、心から厚くお礼を申上げる次第である。（鈴木記）

整理と分類

近世鉱山文書の整理

——荒谷家文書目録の作成を終えて——

大野 瑞 男

本誌第一号の「宝幢寺文書の収集と整理」にも記したように、昨年の「史料館所蔵史料目録」第十六集作成のさいにいっしょに収録する予定であった出羽国秋田郡南比内大葛金山荒谷家文書は、結局のところ外すこととなり、今年三月「史料館所蔵史料目録」第十八集として単独で発行したわけである。

荒谷家文書はわが国にも数少ない鉱山文書の一つであり、当館が昭和二五年度に旧蔵者秋田県北秋田郡比内町大葛金山荒谷千代氏から直接譲り受けたものである。以前より鉱山史に多少の関心を持っていた筆者はこの目録化を担当することとなり、一昨 autumn、旧蔵者宅に出張したのである。東京での事前調査にもかかわらず、現地の事情が判明せず、結局秋田市に赴いて、秋田県史編さん室の相沢清治氏や県立秋田図書館の原武男氏にお会いして、漸く千代氏の嗣子で現当主の荒谷卓次郎氏を大館市におたずねすることができ、同氏

のご案内で旧蔵者宅を訪れるに至ったのである。旧蔵者宅調査の目的の一つは、残されている重要文書の写真撮影であったが、卓次郎氏の御好意によりそのほとんどの文書四〇八点を当館にご寄贈下さることとなり今回の史料目録に共に収録できたことはたいへん幸いであった。同氏はじめ関係各位に改めて謝意を表させていたべく次第である。

さて昭和四四年度受贈分は当然のことながら未整理状態であり、かつ一紙書付が大部分であったから、昭和二五年度取集分の整理の最終段階において新たな整理・分類が加わったわけで、時間が切迫しており、これが荒谷家文書を第十八集に回した大きな理由の一つとなった。

ところで筆者は本文書に整理番号を与えるにさいして、昭和二五年度購入分と四四年度受贈分とを、前者は三桁、後者は四桁の数字を付すことによって区別した。これは本来一体をなす文書ではあるが、購入と受

贈との区分を明確にしておくことが後々のためによりと考えたからである。分類は当然のことながら両者を合わせておこなった。

荒谷家文書の整理に当たった最大の困難は鉱山特有の難解な用語の理解と史料分類の二つであった。用語については目録解題にも記しておいたが、参考になりうる著書や史料がありたいぶ理解の助けになった。

分類については管見の範囲では従来鉱山文書の目録がなく、独自に分類項目を立てねばならず苦勞させられた。鉄山に関しては広島大学寄託の『加計隅屋文庫目録』が刊行されているが、分類項目は、甲生産、乙販売、丙その他、丁藩営鉄山の四つであり、正直にいつてあまり参考とならなかったのである。

そこで荒谷家文書の分類法であるが、荒谷家が安永九年の院内銀山受山以来、秋田藩内各地の多数の鉱山経営に参画していることから、大葛金山以外にも当然それらの鉱山史料が多数含まれている。従って分類の方法としてまず鉱山ごとに分けてから内容分類をする方法も考えられたのであるが、関係鉱山が多い上に、一点でいくつかの鉱山にわたる内容の史料や、数量的史料の中には鉱山

名不明の史料も見受けられることの理由により、内容分類を前提とすることにしたのである。この点ご批判を受けたく思っている。

本文書の特徴としては鉱山絵図を中心とした絵図類が三〇〇点近くあることであろう。しかもそれが藩領各地のものが相当数あるので、他の鉱山史料とともに秋田藩鉱山史にとって貴重な史料となる筈である。本文書のうち院内銀山関係の史料を小栗田淳氏が『日本鉱山史の研究』において利用されている以外にはほとんど未利用の状態である。整理者としては、目録化を機会に本文書が大葛金山ほかの鉱山史研究発展の礎石になればと願っている。

最後に、昨秋の第二〇回近世史料展示会（近世鉱山史料）を担当したときに気付いたのであるが、秋田藩の鉱山の奉行をしていた藩士小貫家文書が当館に所蔵されており、荒谷家文書と密接な関係をもつ史料であるから、これも今回合わせて目録化することが望ましいことであった。しかし史料担当の違いや、整理日程の問題など解決すべきことがあり、小貫家文書目録化の実現に至らなかったことが心に残ることである。

整理と分類

農村文書(二)

村明細帳

藤村 潤一郎

村明細帳には各種の題名があるが近世における村勢要覧としての性格をもった史料である。ここでは甲斐国山梨郡下井尻村(現山梨市下井尻)の享保九年「村鑑明細帳」(下井尻区有文書)と同一〇年「山梨郡下井尻村諸帳面目錄改帳」(文部省史料館蔵依田家文書)を中心に村明細帳について考えたい。

下井尻区には役簀笥がある。扉を開くと六個の引出があり、右側面後部にも小さい一個の引出がある。底面の中央上部に「郷帳箱」、その両脇に「享保十年、乙巳三月」、中央下部に「下井尻村」、その右上に「山梨郡」と書いてある。

前記「山梨郡下井尻村諸帳面目錄改帳」には約一二五種類の一二七冊、約一六〇通、七鋪(絵図)と印判三算盤一、郷蔵錠鍵一、千木一、斗桶一、京升一、乗鞍一、郷帳箱一、郷大どろ一、古帳箱一、銭九文が記るされている。その殆どは郷帳箱に収められていたと推測される。その一部は依田家文書、井尻家文書(文部

省史料館蔵)に現在では含まれている。つぎに明治六年「村帳箱諸書物目錄帳」(下井尻区有文書)には二種類の九二冊、一二三通、七鋪(絵図)と木札一枚が記るされているが、旧幕時代の文書で当時に直接関係のないものは縦帳、横帳、雑絵図といった具合に一括しているので種類は実際には多い筈である。両年を比較すると明治になって意識的に整理して少なくなったのではなく、前述の通り名主宅に適宜移管された結果である。郷帳箱の収容能力もさる事ながら、名主個人の性格も働くのではあるまいか。郷帳箱作製以前については正徳四年「栗原筋下井尻村諸帳面覚帳」(依田家文書)があるが省略する。

さて「村鑑明細帳」は本文中に張紙、抹消があり、表紙に「引合済、多蔵改直済」と朱書し本文中にも朱点があるので、何れが享保九年分か問題がある。

下井尻村は享保九年に柳沢家から天領になり、石和代官所の支配に属

した。大石久敬「地方凡例録」(日本経済大典四三巻)には「郷村請取渡之事」として「郷村請トリ済タル上村々ヨリ早速為差出可請取書物如左」として

一村差出明細帳

但田島高反別石盛等巨細ニ相記シ有之バ別段高反別帳不及請取

(巻十 五六四頁)とあり、更に

一御料ニテモ私領ニテモ郷村諸書物請取スミタル上、廻村状致サレ、早々役人差出シ廻村致サレ、村差出明細帳ニ引合セ、諸事相尋ネ村差出帳ニ洩タル儀可有之ニ付、悉ク吟味イタシ、手帳ニ記ベシ(下略)

(巻十 五八六頁)とある。石和代官小宮山奎之進もこの手続に従ったろう。

野村兼太郎「村明細帳の研究」によると、(一)幕府の巡見使が派遣された場合、(二)領主又は代官、あるひはその代役人の廻村の場合、(三)領主の代替り又は変更の場合、(四)日光社参の場合などに差出されたとしている(二〇頁)。

さて村明細帳の内容については、大石久敬「地方凡例録」に

一村差出明細書之事

コレハ其ノ村田畑高反別上中下ヲ分ケ石盛ヲ記、山林・秣場・川々名川

丈幅・船渡・歩行ワタシノ訳ハ、古城跡・古跡・用水・川除・道橋・極・カケヒ・溜池・堰筋御普請所・自ブシン所箇所数・家数・人数・牛馬員数・寺社修験諸職人有無・用水掛リノ訳・水旱損ノ有無・堂官敷神等ノ員数・御朱印地除地有無・農業ノ外男女稼漁獵場有無・御廻米津出シノ河岸場里数・四木三坪ノ有無等迄、其ノ村ニ有之程ノ儀一事モ不洩様記之、村役人連印ニテ郷村受取タル時、右帳面ニ村絵図三十ヶ年割付写相添へ、役所差出サスル定例也、尤モ年々出スニハアラス、扱又御代官処最寄有之セツハ、元支配ヨリ当シハイへ引渡ニナル書面也、村カタヨリ出シタル帳面タリトイヘドモ、差出ハ公事出入ノ時取用ル書キカタ振合モ末ニ出ス

但出入有之双方ノ内、右書面ヲ証拠ニ申争フトキ、相当ノ儀ハ、トリ用証拠ニ成ル、不相当ノ儀ハ何十ヶ年以前ヨリ認置出スコトニモ、一體村カタ勝手ニサシ出ス書面ニ付、察当申聞トリ潰レテモ不苦由也、其吟味ノ次第第二寄ルベシ(巻十 三九五―六頁)とあり、野村兼太郎「村明細帳の研究」は一二二カ国三七郡一八二カ村の村明細帳から「内容はその調査する者が誰であ

るか、調査の目的が何であるかに依つて異なり、又その確実性も違ふが、殆ど大部分のものが記してゐるところは、(1)貢租その他の公課、(2)村高

(3)家数人口、(4)牛馬数、(5)普請場、(6)朱印地等である。要するに農村の負担能力を明かにせんとする場合が最も多く、これに対する答申は、常に負担大にして生産能力のこれに及ばざることを示さんとする傾向が強いものである」(三〇頁)、また「

上から一定の形式を与へられて、これに従つて記したものである。ここに『村明細帳』の史料としての価値の限界がある」(三四頁)とされている。これらの点は村明細帳のみでなく村方文書全体についても言える事であらう。

また野村兼太郎「村明細帳を調べつつ」(隨筆文化建設)には、一二カ国三五郡八三方村の村明細帳により、「多くの村明細帳が最も詳細に示してゐるところの事項に三つある。第一は貢租関係であり、第二は灌溉水利交通等に関する土木事業であり、第三は寺社関係である」とし、寺社関係は不必要と思われる程詳細であり、「答申者の方も進んで記載せんとするやうな傾向さへみえる」が、これは農民が「それらの多くの社に

果敢ない生命を託して、その信仰に生きてゐた多くの人人があつたのである」としてゐる(三七九―八五頁)。

さて下井尻村には「村鑑明細帳」の他に、宝永二年「諸色明細帳」、宝暦六年「村明細帳」、明和四年「村差出明細帳」、天明八年「書上帳」などがある。甲府代官(兼帯カ)替に際しての明和四年「村差出明細帳」の表紙には、同五、八年に「此扣を以相認差上申候」と認めてゐる。五年は石和代官所に引替りであり、八年は代官の交替である。

分量の最も多いのは享保九年「村鑑明細帳」の五七丁で、最も少ないのは天明八年「書上帳」の七丁であり、大部分は一〇丁前後である。

野村兼太郎「村明細帳の研究」によると、最も多く使用されている題名は「村鑑」と「村明細帳」である(一八頁)。ここにとりあげた「村鑑明細帳」は両者が合体した題名である。しかし「村鑑」と「村明細帳」は本来は別物である。大正四年安藤博編「徳川幕府県治要略」は、村鑑大概帳を官簿、村差出明細帳を民簿としてゐる(三四四―七一頁)。

「村鑑」は「地方凡例録」によると「村鑑大概帳之事」村鑑帖ト云モ享保年中ヨリ始リ、上

西ノ内打紙ニシテ一ヶ村一枚ニ書

表紙ヲ附綴寸法アリ、書方ハ邑高田畠反別石盛ヲ記シ、検地時代姓名ヲ肩書ニシテ、用水引方水旱損有無等、物成諸運上ノ有無、家数人数牛馬数農業ノ外、男女ノ稼御林百姓林秣場漁獵場御普請所、自普請所有無、米ノ津出場、江戸迄海陸里数村方山里並豊窮ノ訳、一ツ書ニカク、此チャウ面ニテ、村方ノ様子荒増相分ルニ付、村鑑大概帖ト唱、御上リ一冊御勘定所ニ一サツ也、是又御前帳故勤方帖ニツヅキ大切ニ仕立、掛リ御勘定ト手代読合アリ、チャウ面カキ様ハ末ニ出ス

但寛政二年以来御上リ一サツニ御勘定所控ハ、年々不及差出、人数増減ノ処ヲ、前年ノ帖ニ掛紙ニテ可直置旨被仰渡タリ  
(巻七 三八七―八頁)とある。

石井良助「村明細帳と村鑑(帳)のこと」は、村鑑帳は代官が作製して勘定所から御側衆に差出して將軍が閲覧する建前で、村明細帳は村方で作成して代官に提出するものとしてゐる(江戸時代漫筆二二三―四頁)。

さて前記「山梨郡下井尻村諸帳面目録改帳」には、「小宮山李進様へ上ル」明細帳下書がある。これが享保九年「村鑑明細帳」に当る。さら

に「石和御役所判物」村鑑明細帳案紙を記している。これは現存しないが、当然これに基いて作製してゐる。その他に作製に際して利用されたとと思われるのは、正徳元年「甲州山梨郡栗原筋下井尻村田畠検地水帳」である。同三年「田畠名寄帳」の

張紙により計算して入作を、宝永二年「諸色明細帳」の出作はその儘、元禄一六年「午年たはこ仕付帳」により以前の多葉粉耕作反別を記している。現存しないが宝永六年「夫食拝借帳」を種貸拝借米の項では参照し、同様に現存しないが正徳元年「絹糸書上ヶ帳下書」、享保三年「諸作仕付帳」も参照しているだろう。しかし家・人・馬数は現存同年度史料の何れとも若干異なっている。また目録改帳にみえず現存もしていないが、享保八・九年「小入用帳」を使用している形跡がある。乏しい考証であるが、下井尻村の名主、長百姓は古帳箱の保管史料と、手許の諸史料によつて、村鑑明細帳案紙の示す項を記述していったのではあるまいか。

## 俗流管理論(中)

中村 俊 龜 智

集まった資料を蔵のなかにどう置いておくか。これは何でもないことのようにみえていて、民俗資料の場合には特に微妙な問題である。

いずれおとらぬ狭い蔵のなかに、無計画におしこめておく、これは、まあ、駄目であろう。どこに仕舞っておいたのか、必要なとき直ぐ出てこない。そして、その道の専門家という人達は、たいてい、表の展示にあきたらず、お蔵をみせてくれませんか、といってくる。

私たちがもと働いていた博物館では、奥の大収蔵庫に入ると、高さ約三メートル・幅二メートル・奥行き約一メートルの大きな木の棚が整然と配置されており、その棚の一番上の段は板戸の押入れ、中の段はガラス戸のケース、下の段は高さ四一センチの引出し四ツになっていて、どこそこの棚の押入れには例えば正月の締飾りをいれておくとか、中の段には藁沓をいれておくとか、どの棚の中の段には草鞋をならべる、どの棚の下の引出しには仕事着をしま

っておく、というように、標本の種類によつて細かくその置き場が決っていた。

この博物館へ入ってきた標本資料は、ひとまず研究室で記録や調査が行われ、そこで種類ごとに仕訳けられ、長い廊下を通つてお蔵のなかに運ばれてくる。この場合の種類というのは、文化庁記念物課の「民俗資料調査収集の手びき」八頁以下にある「民俗資料の分類」の有形の民俗資料の欄の最も小さな項目といったものを念頭においておいていた。けば、まあ、よいであろう。

さて、その道の専門家で特別に研究したい人は許可を得て、係の人の立会で、どこそこの押入れ、どここの引出しを開け、標本を調べることになろう。あるガラスケースにはほぼ日本中の草鞋が集まっていたので、そして、一つ一つの標本には、その標本の素性を記した附け札がつけてあるので、その道の専門家は、このケースを調べるだけで、ほぼ日本中の草鞋の作り方なり呼び名なりの型

や、あるいは使い方まで研究できた。だから、お蔵のなかは研究室の延長であり、その道の専門家と私たちとの、時には交流の場であり、勉強の場であった。

それなら、このような蔵の整理の方法・収蔵の方法は、無条件に誰にでもおす、めできるだろうか。

私たちの答は現在では否定的である。その理由は、この伝統ある博物館がほとんど独力で活動していた時代(昭和のはじめからその三十年代の後半まで)と今とでは客観条件が違つてきているからである。

一、昔は、ある一つの地域を詳しく調査して、その調査にもとづいて標本資料を採集するという例は、ほとんどといつてよいくらいなかったが、今では、その方がむしろ常識となつてゐる。

一、従つて、昔と違つて、標本が一点一点、散発的に入ってくるより、ある地域の標本がまとまつて入ってくる方が多くなる(勿論、散発的に入ってくることも必ずしも悪いことではない。私たちとしてはそれはそれで大変ありがたいのだが)。

一、そうしたまとまりのある標本が入ってきた場合、そのまとまりをバラシてしまつてよいかどうか、こ

れはその郷土館や博物館や資料館のポリシーとも関係することである。

一、最近では資料を展示する場合報告書を書く場合、「何々地域の生活用具」、「何々地帯の民俗資料」といったテーマが必ず登場してくる。

こういう展示や報告のねらいは、標本によつてその地域の暮らしの特質や構造を明らかにすることである。

こうした課題は社会的にも大変重要な意味をもっている。学問的にもまた確かに基礎的な作業である。

一、さきほどの博物館が出来た時代、その段階では民俗資料はまだその内容も、またそれぞれの用具についての内訳も、ほとんど手探りの状態だった。そして、標本資料を集めてゆく過程でそれらの問題を明らかにして行かねばならなかった。今ではおかげさまで、「見通しが立つ」状態にまでなつた。

一、それに、今では各県に幾つかの割で民俗資料の収集や調査にたずさわる郷土館・博物館・資料館ができ、そうした機関の相互の協力によつて、各々の目的をそこなわずに、広域的な資料の研究が出来る条件が生まれてきている。

一、私たちの周囲の傾向も、草鞋なら草鞋の型にどのようなものがある



るか、その呼び名にはどのような型があるか、その型はどのような広がり、ゆきわたっていたか、といったおおよそな話題よりも（そうした問題は勿論大切なことではあるが、それに止まらず）、一歩進んで、その用具が、標本が、その地域の社会や経済の流れのなかで、どのような役割を果たしていたか、その用具を使うのに人々はどのような工夫をしたか、なければならなかったか、といったきめのこまかい話題がとりあげられるようになっていく。

一、そのような認識を得るためには、一つの標本を他の標本と切りはなしてみたり、その標本に係合っている各種の慣行とか慣習とから切りはなしてみることが、ますます、できないことである。

一、近頃では皆カードなどを上手に使い（これも昔の体制では思いもよらないことだった）、標本の入ったときの形をそのまゝにして、そのなかから草鞋なら草鞋を抜出すことなど、決して難かしいことではなくなった。

一、最後に、これは余り大きな声では言えないことなのだが、収集された一群の資料には、不思議と、それを集めた人の態度とか何かが反影

している。資料をうまく使いこなすには、場合によっては、使う前には、集められたときの姿というものを一度みておいて、集めた人の気持やクセをのみにこんでおく必要がある。それが元の形をバラサレたのでは、いわば原典批判できないことになってしまふ。

それなら、入ってきたときの形を崩さずに、いや、余り崩さずに（民俗資料には大小いろんな大きさのものがあるので、本のようにきちんと並べておけるとは限らない）、お蔵に置くのにはどうしたらよいだろうか。

御参考までに一つの事例をあげてみる。

まず並べ方の原則をたてておく。  
1、標本資料は受入れた順に並べる。

2、標本資料は大きさによって、とりあえず、大中小ぐらゐに区分し、それによって容れ物はかえてよいことにする。

そして、小さな標本のためには土器の整理箱（縦七〇センチ・横四〇センチ・高さ一〇センチ）、中位の標本のためにはスチールの棚（ビン、但し、蔵のなかは除湿されている）、そして、大きな標本は壁ざわ

に並べて置くようにする。

3、同じ容れ物同志はいつしよにしておいてよいことにする。

この三原則を適用して、蔵のなかの秩序を保たせる。

標本が入ってくると、記録をとり、それから大きさによって大中小に仕訳け、受入れの順に、整理箱なり、棚なり、壁ざわなりにおいておく。もともとそうしても、私たちのところでは、標本が今の蔵の大きさでははいりきれない。こゝにも一つの問題がありそうである。

（六月三十日まとめる）

※ ※

民俗資料を扱う人のために

一、仕事へのヒントをうるために  
中村幸雄「情報処理」(情報科学講座Cノ11ノ1) 共立出版 六〇〇円  
梅棹忠夫「知的生産の技術」(岩波新書) 岩波書店 昭四四 一五〇円  
三沢仁「フアイリングの要領」実業之日本社 昭四三 三五〇円  
ミュリス・由利淳訳「デイスブレイ入門」技法堂 昭四五 七〇〇円  
小浜昭造「デイスブレイ技法入門」ダヴィッド社 昭四三 四八〇円  
「新訂建築学大系34 コミュニティセンター・図書館・博物館・美術館」彰国社 昭四五 二八〇〇円  
国際博物館会議日本委員会(東博内) 昭四二  
刊行「博物館列品管理の方法」昭四二

(つづく)

新 刊

## 文部省史料館所蔵民族資料図版目録

### 第 4 卷

#### 日本篇 (商工関係用具 I)

杓・斗かき・蒔杓・算盤・物差・棹秤・錘・天秤・分銅・辨当行季・菓子型など

※政府刊行物サービス・センター(東京都千代田区霞が関1-2 電話 591-1924・25)と各地の政府刊行物サービス・ステーションで実費頒布中。

## 分類と整理

### 府県庁文書の目録化と分類をめぐって

鈴 江 英 一

(北海道総務部行政資料室)  
(主 事)

このたび公刊された『史料館所蔵史料目録第17集』（愛知・群馬両県庁文書）について書くよう求められ、あらためて既刊の他の府県庁文書目録にも眼を通してみた。一冊の目録化のためにどれだけ隠れた労苦があったことか、と思いがいたる。同時に、その分類を考え理論化し、確定していったプロセスがどんなであったか、と同じ作業を経験した者として興味がある。

北海道庁所蔵簿書の整理と目録化の場合、担当者が近くない距離をカゴでかつぎあげる作業からはじまったのだが、搬入の当初、一万冊余の簿書がどんな構成をもっているか皆目見当がつかず、せまい書庫を埋めてゆく簿書を前にばう然としたものである。このため分類も、搬入に平行して行なってみた。やはり最初は、事項分類も試み、分類表も作成したが、とうてい処理しきれないとわかって断念した。

というのは、簿書には一つの主題（らしきもの）によって編綴してい

るものと、簿書の様式（実は文書の様式）によって編綴しているものの二つがある。前者は、たとえば「外国人ニ関スル件」、後者なら「諸省文移録」となる。いずれかの簿書が断然多ければ、他を包摂した事項分類が可能かもしれない。しかし、ほぼ両者が同量であると、この異質な分類体系は、容易になじまないものらしい。

北海道庁の場合も、主題と様式のいずれかを主にして、他を従とする事項分類を貫徹できず、ついに年度と機構分類に落ち着いたしだいである。（図書館関係者にいわせると、年度と機構で分けるのは、単に仕分けと呼ぶべきで分類ではないのだそうである。かつて山口県文書館にお邪魔したときもこの議論になったが、その後いかがであろうか。）

ほかの府県庁の目録をみて感ずるのは、事項分類を行ないえたのはおそらく、それを可能とする条件があったためだろうと思う。たとえば次のような場合である。

①かつて事項分類がおこなわれていて、編綴自体がその分類に沿ってほどこされている場合。（福島県の場合は、この例であろうが、12の項目はある年代の県庁の分課機構に対応しているのではなからうか）。②簿書が特定の主題（たとえば、土木・教育など）に限って残っている場合。例外が少ないから事項分類に包摂しやすい。③数量の多寡の問題がある。②にも関連するが、逆に残存が各課にわたり、しかも一年度分の密度が高い場合には、必然的に分類項目は多くなる。しかも各年度に一貫した分類大系を維持するのは、ますます困難になろう。

以上のごとき条件になれば、機構による分類に依拠するほかはない。今回の愛知・群馬県庁文書は、年度と分課機構によって分類されている。この間の意図は、目録の解題や館報13号の原島陽一氏による「県庁文書目録化に関する覚書」で明らかにされているが、基本的には簿書の編冊の成立が分課の機能と切離せない関係にあること、従前ほどこされている「事類」による分類が復元困難であること、事項分類が利用上かならずしも便利でないことなど、と説明されている。このコレクションの性格

を十分に把握しての結論にちがいない。

ところで、この場合にも事項分類が必ずしも不可能でなかったのは、巻末の書名索引に示されている。（ほぼ分課に対応した5ないし9項目に分類、書名50音順に配列）。管見のかぎりでは、県庁文書の目録ではじめてではないか。本文以上の苦心の結実と思う。

画期的な、しかし忍耐のいる索引が出来あがる背景になったのは、原表題の記載が適確で、ある程度の統一がなされていたことと、両県庁ともかつての「事類」（事項）分類の影響を残していたためではあるまいか。このうちすでに存在する「事類」分類の影響は北海道庁の場合も同様で、一部、先人の作業の結果を尊重し機構分類の体系からあえてはずした部分があつた。

このような事実、編冊の状態が分類を規定し、編綴当時の分類がのちのちまでも影響を及ぼす証左であろう。他府県庁の目録をみても同様のようである。藩政文書よりも近代の府県庁文書は、府県庁の機構や事務の範囲自体に共通性があつて分類にもある程度の一般的通則が可能なものかもしれないが、実際にはそれぞ

れに分類を異にしている。担当者の分類に対する考え方の違いというより、簿書の編綴と残存の形態の相違からくるのであろう。

私個人としては、全国的な目録通則よりもつぎのような試みに強く惹かれていた。

最近、簿書を分類する意味とか意義は、いったいどこにあるのだろうかかと自問している。分類項目に簿書をあてはめてしまえば、それで目録化の使命がはたせるわけではあるまい。簿書をうまく分類しおいても、利用する側の要求を十分には満たし得ないのではなからうか。利用者は決して、われわれが分類した項目の簿書だけを検索して足りるはずはなく、テーマに関連して他の項目の簿書をつぎつぎにあさるはずである。

そこでの分類の役割は、ある程度、検索のコードの機能をはたしてはいても、検索の労をはぶくため枠組として「そのテーマの文書は、この項目以外にはありません」と示すようには出来ていない。単なる検索の見出しにすぎないようである。（この点、図書の種類とはいへん性格を異にしていると思う）。

もし、真に徹底した検索、迅速な利用を可能にする目録が必要だとし

たら、それは簿書を単位とした分類ではなく、個々の文書を単位とする分類であらう。たとえば、地租改正であれば、地券発行の達から、地所調、丈量、地位等級評価、地価決定、地租徴収にいたる一連の文書が、事務の流れにそつて、県庁規模で、あるいはまた各地方・各村ごとに、整理・分類され検索できる目録を作成する必要がある。（もつとも、この検索のためには、古典的な分類体系では十分でなく、多元的検索のシステムの必要を予測させる）。

それができるまでは、利用者の時間的・経済的負担が絶大であつて、いきおい、どこでも所蔵機関のま近かにいる人以外には、容易に接近しがたい状況を生みだしているのではないか、とおそれる。

これは、遠くから泊りがけで調べにくる人、意外と当室の簿書の存在が知られておらず、あるとわかつていても、なかなか利用しきれない実状からくる、体験的反省の一端でもある。

## 史料館所蔵史料目録第十七集 刊行に寄せて

近年、各県において文書主管者が大量に保存する行政文書の恒久的保存策確立と相俟つて、文書館設立運動が各界の要望を結集し、急速に高まりつ、ある。この時に当りそれら大量の行政文書が、文書館設立と同時に移管が予想されるので、それらをどのような体系で保存、整理、分類し、利用者の要求に即応するかの具体的提案は、関係者にとり喫緊の事柄である。なかでも適切な分類基準に基づく目録化の促進は、文書館ないし類似機関のもつとも重要な課題と考えられる。

ところが、現段階における各県の行政文書目録化の成果を瞥見すると、刊行をみたのは数道府県に止まり、やつとその緒についたというのが実状であり、また既刊目録の内容に示されている体系化についても、各機関が保存する文書の差違、及び一般化した分類基準未成立等の事情により区々で、なかには斬新な提案を含むものもあるが、なほ模索状態を脱しきれぬ状態である。

大 村 進

（埼玉県立浦和図書館文書館  
行政史料係長）

かような状況下に、このたび文部省史料館が、愛知・群馬両県の県庁文書を分類整理し、史料目録第十七集として刊行されたことは、まことに時宜を得たことであり、今後県市町村行政文書の目録作製に従事する者に対し、貴重な提案となるに違いない。分類整理に際し多数のご苦心のあつたことは、日頃この業務に携わりさまざまな問題に直面している私共には、一見ただで窺い知ることができた。そこで同目録の刊行を機会に、今後積極的に県行政文書、広くは近代史料の目録化を進めるという観点で、日頃体験している二・三の問題について述べてみたいと思う。

既に指摘した如く、県行政文書の目録化を阻む第一の問題点は分類基準の確立していない点にある。この原因は、近代史研究の立遅れに基づく史料の未開拓や、長い間文書の一般公開を阻んできた文書管理制度にも根ざしていたのである。しかし最近の研究の進歩発展は、豊かな資料

群を誇る県行政文書の公開を強く要望してきたため、いきおい各地で文書公開施設設置が検討されてきたのである。

分類基準は、利用者が自己の要求する資料を能率的かつ迅速正確に検索できるよう体系化されるのが理想であるが、文書供給側にとり利用者の要求が複雑多岐にわたるところに困難点がある。もちろん研究の自由と多岐性は視点の単一化を拒むものである。しかし供給側では膨大な量の文書を短時間で整然とした分類整理を希うため、多数の利用者のさまざまな要求から共通事項を抽出し、それに文書自体の体系を加えた分類基準の策定を希求するのである。このためには、供給側が努力を傾注するのは言うまでもないが、利用者側も文書を積極的に利用駆使し、その資料的価値を十分に明らかにして逆に供給側へ要求を出すこと、なかんづく利用頻度の高い近代史研究者からの積極的提案を期待したいのである。利用側と供給側とが互いに意見を交換しあい討論しあうなかで、はじめて両サイドに望ましい分類基準作製が可能となる。

第二に、県行政文書の目録化は簿冊目録に止らず件名目録にまで進むのが望ましいと考える。既刊目録で

は①編冊簿書名、②①に編冊文書の内容を摘記するもの、③編冊各文書名(件名)を収録するものの三つに別けられる。第十七集では②の立場をとり、簿書の原題に主要件名を概括した内容摘記を付記してをり京都府庁文書目録では簿書原題に主要件名をそのまま付載し、両者ともに限られた予算と定員内での努力の跡が窺えるのである。

県行政文書は文書規程により完結後、簿冊に編冊され保存されるのが通例であるため、埼玉県を例にとると、明治期文書で多いものは百数十件、平均四一五十件編冊されている。編冊文書中些末なもの、及び連続する類型文書は省略、統合の手を加えるとしても、②の方法では文書の全貌を捕えるのに限界がある。史料として重要なのは文書の簿冊表題名ではなく、編冊されている各文書の標題(件名)であるから、極端な言い方をすれば件名目録だけがあればよいという考え方もでき、本県では以上の点を考慮し、簿冊の目録と件名目録とを併せ刊行しているが、これには莫大な労力と経費を前提とするので、長期にわたる計画と措置が必要となる。

第三は、目録化の前段作業である分類カード作製上の問題である。こ

れには二つの問題が予想され、一は分類カード作製の範囲であり、二は標題名決定に伴う問題である。前者には簿冊カードと件名カードの二種があるが、問題が認められるのは件名カード作製に際してである。まず編冊文書がどこまでの範囲を一件とするかの判断を要求する場合があり、何原議の有無、決裁・収受印、起案・発送月日、文書の標題等を手掛りとして決定するが、なかなか杓子定規どおりいかないことが多い。大別すれば①画然と一件にまとめられるもの、②さらに分出を必要とするもの、③同一類型が多数連続するもの、④資料としてきわめて特殊なものの、に分けられるが、①は問題なく、②にはそれなりの歴史的判断を必要とし、③の省略・統合と絡んで担当者の主観的判断の入るところである。④は人権侵害の恐れあるもの、及び土木関係書類のように一案件が多数独立して出てくる場合等があつて、③同様、予算の効率的活用や、仕事の能率的進行面からも適宜省略、統合に考慮を要するのである。当館では全員協議の上、基準を設けて歩調を揃え、目録刊行の際その旨を明記している。

次に標題決定についてであるが、これについては第十七集の目録解題

にも触れられているので詳しくは述べぬが、件名題でたとえば「明治四十一年県令第四十七号改正ノ件」等とある場合、利用者には県令の内容がわからぬので、その内容を簡潔に補ったり、郡町村名のない地名にはそれを補うなどの心遣はほしい。要は、煩瑣にわたるのは如何かと思うが、余り形式に流れぬよう、常に利用者の立場に立つて配慮することを強調したいと思う。

最後に、最近の文書処理の傾向には文書館にとり憂うべき状況が生じつつあるのを指摘して結びとしたい。それはファイリング・システムの導入に伴う問題で、これについて「ファイリング・システムとは、如何に文書を手上に廃棄するかシステムだ」と説く人もある程で、本旨は異なると思うが、多数の貴重な文書が文書館移管前に廃棄されてしまう虞れがある。加えてこの方法では文書は各個バラバラの状態でおキエ箱に保管されるため、大量のスペースを要し、引継ぎの際には別途の方法(編冊製本し直すとか)が講じられねばなるまい。

なお、各県とも最近マイクロの導入が目立っているので、これの引継分類整理、及び目録化についても早晩検討を迫られるように思われる。

## 京都府立総合資料館の 現状と当面の問題点

京都府立総合資料館

当館は、「京都に関する資料等総合的に収集し、保存し、展示して調査研究等一般の利用に供する」目的をもって設立され、知事部局に所属する文化施設として誕生したものであります。

したがって、組織としては当館の設立趣旨に即応した各種の資料を取扱うために資料部と図書部が設けられておりますが、前述のとおり、当館は知事部局に属する調査研究的機関でありますので、その事業内容が現象的には図書館や博物館・美術館などと類似しているように思われます。しかし、当館とそれらの類似機関との間には、本質的な相異があることを先ず強調しておきたいと思えます。

次に、資料部と図書部は、それぞれ別個に運営されているのではなく、一体的に有機的なつながりをもって運営されており、また研究室、会議室・講堂など利用者の調査研究のための特別の場所をも提供していることは当館の特色であるかと思いま

す。

以下、資料部と図書部に分けて、それぞれの現状と問題点を簡単に述べてみたいと思います。

資料部では、京都に関連した現物資料と古文書を収集・保存し、必要に応じ、計画的に展示室、館藏品陳列場・資料室などに陳列し、観覧に供し、調査研究の便を図っております。

古文書の中心は東寺百合文書（約二万点）であって、目下非公開のうちにその整理と補修に力を注いでいますが、近い将来この作業が終了しこれをどう公開して活用を図るかが課題になっていきます。また、「東寺百合文書図録」を刊行し、毎年講習会などを開催して、研究資料としての価値に注目してもらうように努め、将来に備えて広い利用の準備をしております。

近世文書も収集、保存に努力していますが、最近府内市町村その他で文書の保存に関心を示しはじめていますので、当館の収集活動が古文書

の価値を吊上げて散逸を招くことにならないように、関係者間の調整が新しい課題になりつつあります。

古文書以外の実物資料は、京都の伝統美術・産業の資料と有形・無形（民謡・民話）の民俗資料に重点をおいて収集・保存に努め、今日約四万点を収蔵しております。京都には国立博物館、国立近代美術館・京都市立美術館など公私の類似施設が数多く存在しますので、当館はこれらの施設と競合をさせ、当館の設置目的に立脚して、図書資料と同様に京都の特色を資料の収集、展示に具現化していかなければなりません。これが今後の大きな課題であります。

図書部では、開館（昭38・11・15）以来数年の間は所蔵図書が少なかつた関係もあってか、図書資料の収集が網羅的になり、その機能も社会教育機関としての図書館的色彩が強くなつてまいりました。しかし、その後図書二〇万冊余、逐次刊行物四千種以上になりましたので、三年ほど前から、このような傾向を是正し、本来の設立趣旨にそつた図書資料の収集、即ち、京都に関する資料を中心とし、これが調査と研究に必要な関連資料を重点的に収集するように努めてまいり、特に今年度からパン

フレット・リーフレットにも重点をおくことにしました。

現在、閲覧室としては、大閲覧室、軽読書室、学習室の三室を設けて運用しております。

大閲覧室は、最も主要な閲覧室で、一般社会人および大学生以上の調査研究的な利用に応ずるよう四百の座席を設け、約四万冊の図書をいわゆる主題別方式で開架し、閲覧者が自由に利用できるようにしております。しかし、利用者の七割ほどが大学生であり、大学図書館の延長の観を呈していることは、今後の運用面における検討事項であらうと思ひます。

軽読書室は、約百人分の座席を設け、雑誌、随筆、小説など約五千冊を開架し、利用者が気軽に読書できるようなしておりますが、当館としては、中・高校生を対象とした学習室（席数二一六席、開架図書約六千冊）と同様に、あくまでも附随的暫定的な施設であり、将来は府立図書館の充実と相まって廃止すべきものだと考えております。

## 古文書の活字化

猪 井 達 雄

(徳島県立図書館  
整理課長)

昭和四十四年、県立図書館へ転勤を命ぜられたが、私の職務の中に古文書古記録の仕事があった。まず古文書の読解にとりくんだ。

「読む」「理解する」それは「大切にする」ことにつながる。こう考えた私は、古文書の読解者を一人でも増やすことだと、近世史料講習会をはじめた。それには私も講師であるとともに講習生でなければならぬと、当県古文書解説の権威者である徳島県資料専門調査員金沢治氏の指導を受け、図書館員に高校教諭それに私も加わり講師となって現在までに三回の講習会を開いた。参加人員は毎回四十名程度、香川県からも二名の参加を得、この講習生を対象に藤丸昭司書が中心となり昨年からは毎月一回の古文書通信教育もはじめている。

一方この年から史料所在目録の作成刊行に着手し現在までに二郡一市を終わり引き続き実施しているが、その採録したものは、昭和初期にしたものと比べると十倍以上の件数に及び、まさに古文書の宝庫の感がする。この成果は、複写セロックスの

導入、コンマイクロカメラの購入、さらには、資料専門調査員一名増の予算要求がとおり、今では金沢治氏とともに荒岡一夫氏とお二人でこの仕事にあたっていた。また昨年からは古文書研究長期国内留学生として図書館に教員が派遣され、現在は中学校教諭岡田一郎氏が研究に専念されている。

古文書の活字化として続徴古雑抄の刊行がみとめられ、こうした一連の活動が反映してか、徳島新聞社の姉妹社である株式会社出版から阿波の古文書シリーズが刊行されることになり、すでに「阿波の百姓一揆・三好昭一郎著」がだされた。このシリーズに私の解説の安永生れの百姓の「丹兵衛日記」が近く刊行される。また淡路城代稲田氏の史料もタイプ印刷をしている。古文書の解説、価値あるものの活字化、それは私の重要な仕事であり使命でもある。古文書の解説それは百年前、二百年前の人との語らいである。古文書の活字化が、各地で推進されることを祈念して筆をおく次第である。

## 長崎県の郷土資料

石 田 保

(県立長崎図書館  
史料課長)

昭和四十三年十月、明治百年記念事業の一つとして長崎県史料館が県立図書館に増築され、運営は図書館旧蔵の郷土資料を中心に新たに史料課をつくってあたることになった。

資料についても原本にとらわれない広範囲な収集と県域を中核とする調査研究のメディアムとして今後一層の利便をはかるよう努力しつゝ、ある所蔵の資料の主なもの、行政資料では長崎奉行所より本県へ伝存のもの、明治期の長崎県庁簿冊類で、寛文から幕末までの長崎奉行所判決記録「犯科帳」をはじめ、「御仕置伺」「口書」等の司法関係、「御用留」その他の行政関係から嘉永以降明治期にわたる各国領事の「回章」「来翰」など原文をふくむ外交関係、文化天保年間の「割符留帳」など貿易資料、寛政以降の「異宗一件」外キリシタン関係資料がありこれらは、お、むね早くから各研究者の利用対象となっている。なお、明治期の神社寺院明細帳など社寺関係簿冊や近代地方教育の制度を知る好個の資料である明治十五年以降末年までの「教員進退録」をはじめ多くの簿冊も残っている。なかには明治十一年「文部省日記」もある。

個々に収集されたものは枚挙できないが、洋学関係版本や写本類、西籍図書類がよく集められている。洋学本で一例をあげると本木了意の「和蘭全軀内外分号図験号」、杉田玄白の「解体新書」、宇田川榕斉の「和蘭内景内象銅版図」など、語学でも「訳鍵」や「和蘭字彙」はもちろんオランダ通詞中山作三郎の「ドウフ・ハルマ」稿本ほか英学にいたるまでの多くの版本や写本がある。西籍図書も十七世紀の刊本、ミラノやローマ刊「耶蘇会士日本通信」、ツルセリニ「ザビエル伝」、カルデウム「日本殉教精華」などキリスト教関係から、外国人の日本見聞記であるカロン「日本シヤム大王国志」、モントナス「日本志」をはじめ十八、九世紀のものではフアレスタイン「新旧東インド誌」から長崎渡来者のケンベル、ツェンベリ、シーボルト、チチング、メイラン、ドウフ、レヴィソン、ポンペ等の日本関係著作があり、特にシーボルトの関係著作は二十数点がある。

# 四六年度新収史料紹介 (一)

受託 史料 上総国久留里 黒田家文書

本文書は、第一史料室が行なった昭和四四年度「旧大名家所蔵文書の所在調査」において基礎的な調査を終えていたものであるが、今回、所蔵者の黒田経之氏（神奈川県川崎市今井西町一七四）のご好意により、当館が寄託を受けるにいたつたものである。当初からこの調査に対して格別のご理解を賜わり、貴重な襲蔵史料を、学術研究のために寄託し、公開することを承諾された黒田氏に對して、改めて、ここに深甚の謝意を表したい。

黒田氏は、丹治姓中山氏に発し、館林藩家老であつた外祖父黒田直相のもとに養われ、綱吉の近侍となつた直重（直邦、万松院）以後黒田氏を称した。元禄一三年大名（一万石）に取立てられ、同一六年常陸下館一五、〇〇〇石、享保一七年、上野沼田三〇、〇〇〇石を経て寛保二年、上総久留里に移り世々襲いだ。

本文書は、総点数四一七点（九七冊、二八九通、九巻ほか）。相伝系図・系譜類、官位関係文書が揃つており、明治以降の家関係史料も、明治四一―大正二年家扶日記全三七冊を含めてまとまつている。

勤役・御役儀に関するものは少ない。享保二〇年の館林在番時の黒印

状・老中連署書附等数通が目立つ程度である。本文書の特色の一つを示す史料は、明治二八年七月に旧臣森勝蔵が編さんした「雨城廻一滴」（全三三冊。但し九冊は欠けているので、再調査を期している）であろう。本史料は、森が黒田家の請を受けて、主として久留里移封後の史料を、領知・家・御勤役・家中・藩政の各般にわたつて収録した黒田家史であり、関係史料が大部分散逸した今日利用価値の高さにおいて比類のないものといえる。西丸老中も勤めた初代藩主、瓊山黒田直重の著名な神道書「鳴鶴鈔」（全二五冊 依田貞鎮補）のほか、文人としても名高い直重に関わる和歌・易・神道書関係資料も、本文書の他の一つの特色をなすものであらう。ともあれ、この寄託を喜び、今後の研究の進展を期待したい。

\*本誌第10号参照。\*同書「緒言」によれば、森はこの以前に「多治比方令類纂」数百巻を編さんしたらしいが、これは火災で烏有に帰したという。

## 昭和四六年度 文部省（史料館）主催 近世史料担当職員講習会（東日本地区）について

一、趣旨 公共機関などにおいて、近世史料を取扱う事例の増大にと

もない、これに関する知識技能の向上が要請されているが、このよ

うな事態に対応して、当該関係者に近世史料の読解、調査、収集、

整理、分類、保存管理などに関する基礎的な知識技能を習得させ、

近世史料の保存、利用の効果を高めるために本講習会を開催する。

二、期日 昭和四六年九月二七日（月）から十月二日（土）まで

三、会場 国立教育会館（東京都千代田区霞が関二―二）

四、講習内容（カッコ内は講師）

(1) 史料概論

中世史料概論 豊田 武

近世史料概論 鈴木 寿

近代史料概論 古島敏雄

関東地方近世史料の概況 木村 礎

(2) 近世史料読解（本館研究員）

幕藩史料 町方史料 村方史料

(3) 史料処理（本館研究員ほか）

史料の分類 史料の整理管理

史料の保存科学 東京国立文化財研究所 修理技術研究室長 岩崎友吉

史料の補修 宮内庁書陵部 遠藤諱之輔

(4) 民俗資料（本館研究員他）

近世の遺物遺跡 東京都教育庁 金山正好

(5) 講演 「実学・洋学関係史料に ついて」

民俗資料の整理と管理 愛知県大 杉本 勲

(6) 座談会

(7) 見学（東京都公文書館）

五、時間数 三三時間（二二單元）

六、受講資格 東日本地区（中部地方以東）所在の図書館、史料館、

地方史誌編纂室などにおいて近世史料の取扱を主務とする職員、ま

たはこれに準じた者で、史料取扱経験三年未満の者

七、受講人員 三〇名

八、申込方法などについては大学・地方公共団体などを通じて連絡されている。

## 第二一回 史料展示会

### 一、展示史料

愛知・群馬両県庁文書

### 二、期日

昭和四十六年一〇月二四日(日)  
二五日(月)・午前一〇時から  
午後四時半まで

### 三、会場

文部省史料館

## 集 報

### ○昭和四十六年度事業(その一)

#### 一、史料の収集

上総国久留里黒田家文書(別稿参照)・  
三河国吉田大河内家文書・山梨県山梨市  
下井尻区有文書(旧地名甲斐国山梨郡下  
井尻村)の寄託をはじめ、数件の寄託・  
購入・マイクロフィルム複写を予定して  
いる。

#### 二、近世史料担当職員講習会

1 第十七回(西日本地区) 別稿のよ  
うに六月七日より一二日まで山口県文書  
館において開催した。

2 第十八回(東日本地区) 九月二七  
日より一〇月二日まで国立教育会館を会  
場として開催するが、詳細は別記募集要  
項を参照されたい。

#### 三、史料展示会

1 四月七日、法制史学会大会に協力、  
近世法制史料を展示した。

2 第二一回史料展示会は別掲のように  
一〇月二四・二五両日「愛知・群馬両県  
庁文書」展示会を開催する。

#### 四、近世史料目録の調査

本誌第二二号で詳記した表記の調査は  
四六都道府県のうち三一都府県から調査  
結果の回答をいたしているが(五月現  
在)なお回答未着の県の関係機関に引き  
続きご協力をお願いしている。

#### 五、刊行物

1 『史料館所蔵史料目録』第十九集お  
よび第二十集として、常陸国行方郡牛堀  
村須田家文書と伊予国伊予郡上野村玉井  
家文書の目録を刊行の予定。

#### 2 『史料館所蔵民族資料図版目録』

第五巻 日本篇(生活用具Ⅳ)として、  
墨細工などを収録の予定。

3 『史料館研究紀要』第五号、数点の  
論稿を収録、本年度末刊行予定。

#### 4 『文部省史料館報』 本号を含め、

昨年どおり、七月・十二月・四十七年三  
月の年三回発行予定。

#### 六、定例研究発表会

第三四回(46・5・27)  
近世米穀取引市場としての大津

鶴岡 実枝子

### ○評議員会

昭和四十六年五月一七日、前年度事業報

告、本年度事業・予算について、ついで  
七月二三日、来年度予算要求についてそ  
れぞれ説明がなされ、協議が行なわれた。

### ○史料の貸付

京都新聞社主催 徳川三百年「サムラ  
イと町人展」(四十六年四月一七日〜五月  
二六日)に薬研・富札など三〇点を貸出  
した。

### ○人事異動

昭和四十六年四月一日 採用 大中 敏子

### ○昭和四十六年度科学研究費交付

#### ◇一般研究(D)

江戸期地方米会所の研究 鶴岡 実枝子

### 閲覧業務停止のお知らせ

当館所蔵史料の閲覧時間

平日 午前九時三十分から

午後四時三十分まで

(土曜日は正午まで)

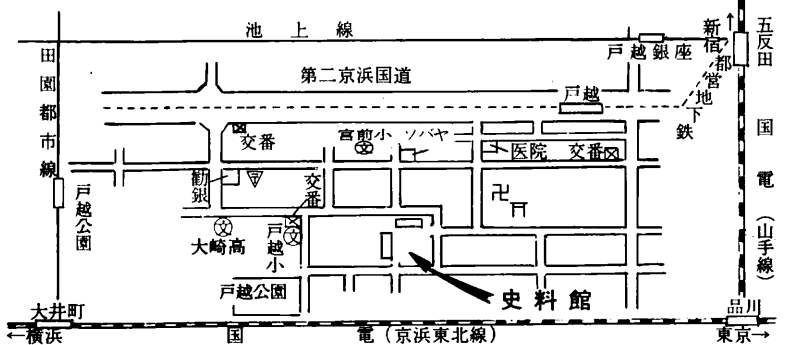
日曜日・祝日および年末年始

(十二月二十七日―一月五日)

は休館日とします

なお、展示会の実施にともない、  
次の期間の閲覧業務が臨時に停止  
となる予定ですのでお知らせいた  
します

一〇月二日(金)〜同二六日(火)



文部省史料館報 第一四号  
昭和四十六年七月二二日発行  
編集・発行者 小和田武紀  
文部省史料館  
東京都品川区豊町ノ六ノ二  
電話(七八三)九一〇六代  
印刷所 三恵出版印刷株式会社  
東京都大田区田原町二  
電話(二六二)一四四三番